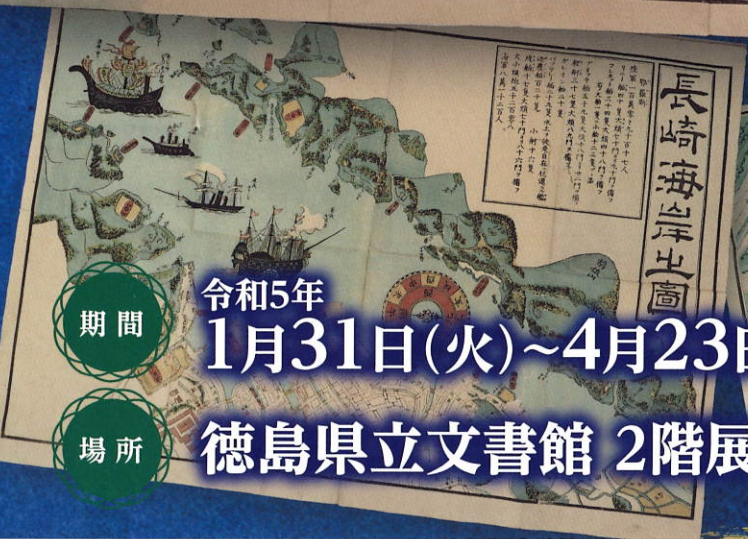
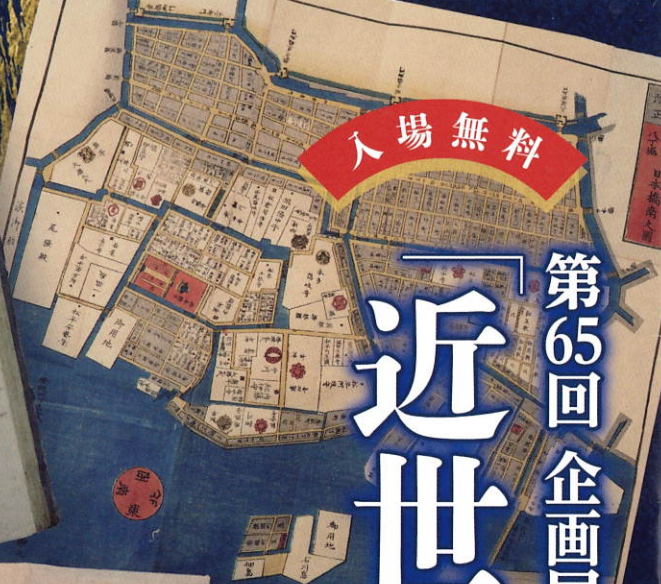


入場無料

第65回企画展

# 近世小松島商人の蔵書Ⅱ



期間

令和5年  
1月31日(火)~4月23日(日)

場所

徳島県立文書館 2階展示室

展示解説

2月11日(土)・3月25日(土)・4月14日(金)  
いずれも午後1時30分~午後2時30分





## ごあいさつ

徳島の南、近世以来港町として商人の町であった小松島において、多田家・西野家は富豪として知られた家です。多田家は享保期以来小松島市南部の金磯新田の名主として新田開発に成功した家です。また、西野家は小松島浦の加子人から江戸に支店を持つ関東売り藍商となり、さらに讃岐国琴平において「清酒金陵」で知られる酒造店を開いた豪商でした。

現在、小松島市教育委員会の所蔵で、徳島県立文書館が寄託資料として預かっているこの資料群は、元々『小松島市史』編纂のため、収集されたといえます。その後、小松島市中央公民館に置かれていましたが、保存・管理が難しいというご相談を受けてお預かりしたという経緯があります。さらに、平成六（一九九四）年には第八回企画展「近世小松島商人の蔵書」展として徳島関係の蔵書を中心に紹介しました。しかし、実は全部で九千点を超える膨大な蔵書群であり、「西野家」と「多田家」の蔵書が混在してしまつた上に、漢籍も多く整理の手を付けられない状況にありました。

このたび、前回の展示から二十五年以上を経過してようやく全点の蔵書整理が終了し、小松島市教育委員会と正式に寄託契約を締結することができました。現在は、令和五年中での資料公開に向けて、蔵書の内容を確認しているところで、「西野家」「多田家」の蔵書を分ける情報を集めたり、虫喰いなどの状況を調べています。

その蔵書は膨大で内容も多岐にわたっており、こうした富豪の収集物が地域の文化を大いに押し上げていたことがうかがうことができます。展示ではその一端をご覧いただき、多様な蔵書群を知っていただくことができると考えています。

今回の企画展に当たり、辛抱強くお待ちいただいた小松島市教育委員会、多田・西野両家のほか関係者の皆様に対して深くお礼を申し上げます。

令和五年一月三十一日

徳島県立文書館長 金原 祐樹

## 「産論」と「産論翼」

賀川流産科の祖とされる賀川玄悦（一七〇〇—一七七七 字は子玄）は近江国彦根の出身で、京都に出て産科を学び膨大な臨床経験を元に明和二（一七六五）年『産論』を著した。明和五年藩主蜂須賀重喜の招きに応じ徳島藩医となり百石を得ている。『産論』はその後、シーボルトにより、シーボルトの弟子で阿波国羽ノ浦の人であった美馬順三の翻訳が世界に広く紹介されることとなり、世界に先がけて胎児の正常胎位を確認した文献として知られている。

賀川玄悦に弟子入りし後に養子となった賀川玄迪（一七三九—一七七九 字は子啓）は出羽国出身で、養父を継いで徳島藩医となり、多くの弟子を持つ賀川流産科を広めた。特に安永四（一七七五）年の著書『産論翼』は『産論』の難解な部分を図などを用いながら補い解説している。

この二人は京都を中心に活躍していたとされるが、徳島から来た門人も多く、さらに三代目玄悦の時から、徳島に赴いて活動する事があつたと知られている。





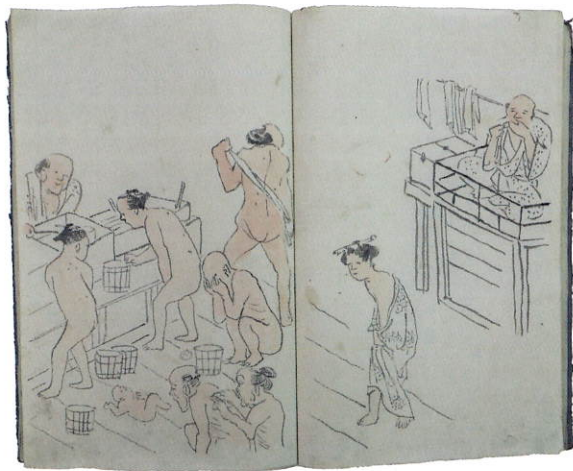
## 西野家 多田家

西野家は郷町として発展する小松島浦を拠点に江戸時代前期から藍玉の江戸（関東）売りに乗り出し、阿波国屈指の大藍商へと成長し、讃岐国（香川県）琴平での酒造業にも乗り出した。小松島浦で廻船業などを営んでいた多田家は元禄年間に金磯新田の開発に着手し、享保十（一七二五）年に完成した同新田の新田名主となった。幕末期の当主である多田宗太郎は金磯弁天山に砲台を築いて藩に献納し、これにより彼は郷士格となっている。

西野家と多田家には膨大な量の和本類が残されているが、ここでは両家に関連する資料を紹介したい。

### 『倭人物画譜』前編

江戸時代、絵の手本集である画譜が盛んに刊行されているが、寛政十一（一七九九）年に刊行された『倭人物画譜』前編もその一つである。そこに載せられているのは円山応挙の高弟（応門十哲の一人）である山口素絢の人物画で、当時の庶民の姿が生き生きと描き出されている。



▲『倭人物画譜』前編より「湯屋」

題辭は儒学者の皆川淇園、序は名所図会の先駆者として知られる秋里籬園が寄せている。

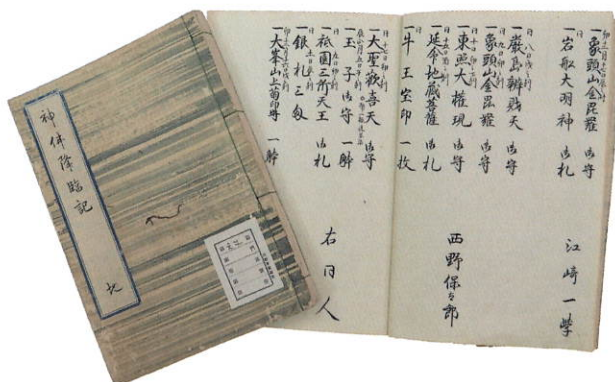
ここに紹介したのは、この『倭人物画譜』前編を多田家の第八代当主である多田助右衛門が文化五（一八〇八）年に模写したものである。撃壤子などの号を持つ彼は家業の傍ら画家としても活躍し、晩年の閑々子（僧侶で詩・書・画にすぐれる）との親交でも知られている。

### 『神仏降臨記』 天・地

慶応三（一八六七）年の七月に始まったとされる「ええじゃないか」の狂乱は瞬く間に各地に広がり、同年の十一月には阿波国にも上陸している。

「ええじゃないか」ではそれに先行する伊勢神宮への御蔭参りと同様に、各地で神仏の御札などが降ったことが知られている。西野家に残されていた『神仏降臨記』天・地は、慶応三年から翌年正月にかけて、小松島浦とその周辺のごとくに、いつ、

どのような神仏の御札・御守・御影・神像などが降ったかについての詳細な記録である。阿波国における幕末維新史を研究する上での貴重な資料となっている。





## 知へのいざない

西野・多田家旧蔵の和本類の内容は極めて多岐に亘っている。  
ここではその一端を紹介しよう。

### 『倭漢三才図会』

西野・多田家文書には多くの辞書・事典があり、その一つが『倭漢三才図会』である。これは、中国・明代の『三才図会』を範として、大坂の医者・寺島良安が三十年余りかけ完成させた百五巻の絵付き百科事典である。「三才」とは「天地人」のことで、この三つをともに明らかにしてはじめて人の疾病について語ることができるとの考え方により、和漢の古書や言い伝えなどを基に編纂された。項目は天文から始まり、人や人の営み全般に関わる道具や禽獣などの生き物、地に関わる地理や植物などの項目が続き、中には「龍」や「麒麟」など、空想上の生き物も登場する。南方熊楠が筆写し、参照の書の一つとしたこともよく知られている。



### 『伊呂波節用集』

節用集は室町時代末期頃に成立し昭和初期まで作られた国語辞典で、単語をいろは順に並べ、主題ごとに分類した辞書である。江戸時代には様々な節用集が出版された。その一つが、『伊呂波節用集』のように用字検索を目的とした簡便な体裁の早引節用集で、単語をいろは順と仮名数順で並べてあり、携帯しやすい大きさのものが多く、この『伊呂波節用集』を見ると、草書で書かれた単語の両側に音訓が付され、楷書も併記されているが、現在の国語辞典のように意味は書かれていない。これとは反対に、絵図や人物誌などの付録が付いた家庭用百科事典のような節用集も出版されている。早引節用集とは異なり、大型で厚みのあるものもある。



### 『延喜式』

「延喜格式」とは、「弘仁格式」「貞観格式」とともに「三代格式」と総称される全五十巻からなる律令の施行細則である。延喜五（九〇五）年藤原時平らが醍醐天皇の勅をうけ、弟の忠平が業を受け継ぎ、延長五（九二七）年に完成奏上され、康保四（九六七）年に施行される。平安初期の禁中の年中儀式の規則が細かく記されている。

阿波についての記述は、「神祇十卷神名帳下」の巻に阿波国五十座の神社名が記載されている。また、「神祇七卷踐祚大嘗祭」の巻には、阿波国忌部氏が鹿服あづたえを貢進する際の細やかな手順や、由加物（供え物）である物産品やその数量、「已上那賀潜女かづめ十人所作」といった収穫する者の出自や人数までこと細かく記されている。宮中行事においての阿波の役割がうかがえる興味深い資料でもある。





### 『土左日記抄』上・下

『土佐日記』は、平安時代前期に紀貫之が著した日記文学書である。土佐の国司として赴任していた貫之が、任を終え土佐から帰京するまでの旅の様相を綴ったもので、女性に仮託した文体で書かれている。

西野家に残る『土左日記抄』は、この『土佐日記』の注釈本で、北村季吟により江戸時代に書かれたもの。内容は、紀貫之の伝記と『土佐日記』の成立事情、題号の由来等の後に本文・注解という構成になっている。

阿波に関する記述も何方所かあり「土佐泊は阿波国也、鳴門に近し…」等と解説している。季吟の「抄」は、注釈書としての内容も充実していた上に、大量印刷が可能になったことで、広く普及した書籍であり、本居宣長も「抄」に校合書き入れをし、『土佐日記』の講義に用いている。



西野家には、他に佐々木信綱註の『校註土佐日記』も残っている。

### 『作良閑理（さくらがり）』

『作良閑理』は七条村（現上板町七条）出身の町医者七条文堂が記した桜見物の旅行記である。文堂は医学以外にも和歌や国学など幅広い学問を身につけた人物で、本書の随所にそれが現れている。鬼籠野（現神山町）へ桜見物にでかけたのは文堂と友人の「千里」の二人。二人は『阿波名勝案内』にも紹介された名所を巡りながら弓折（現神山町鬼籠野）を目指す。同地は佐々木経高の次男高兼が自害した伝説が残る地で、弓折の桜が手馴れた筆致で色鮮やかに描かれている。



### 『欧行略記』

『欧行略記』は徳島藩の銃卒で絵師であった原鵬雲（はらほうぐん）が文久二（一八六二）年の遣欧使節団に随行した時の日録で、大英博物館などを訪れた記録も見られる。本書はこの写本のほかに呉郷文庫本と大正年間に「尾蠅欧行漫録」として雑誌に掲載されたものがあるが、『尾蠅欧行漫録』は共に欧州諸国に渡った市川渡の著作として知られている。また『欧行略記』と『尾蠅欧行漫録』は内容が殆ど同じであり、二種類の欧行漫録の関係性については不明瞭な部分が多く、原と市川の二人で『尾蠅欧行漫録』を仕上げた可能性が高いものの確かなことは謎に包まれている。





## 歴史へのまなざし

『神皇正統記』・『太平記』・『絵本楠公記』  
～南朝へのまなざし～

『神皇正統記』は、南北朝時代に南朝の北畠親房が著した歴史書である。神代から始まり、後村上天皇（一三六八年没）までの歴代天皇の事績を記している。土御門天皇の項では、承久の乱（一二二一年）の後に阿波国に遷移されたことが記されている。独自の思想や政治観が織り込まれており、徳川光圀や新井白石など後世の歴史家に大きな影響を与えたとされている。

『太平記』は南北朝時代を描いた軍記物語で、後醍醐天皇の即位から鎌倉幕府の滅亡、観応の擾乱、細川頼之の管領就任の頃までを描いている。儒教的な大義名分論が基調となっており、江戸時代には路傍で『太平記』を講釈する「太平記読み」が流行ったことから同書の内容が庶民にも広まった。



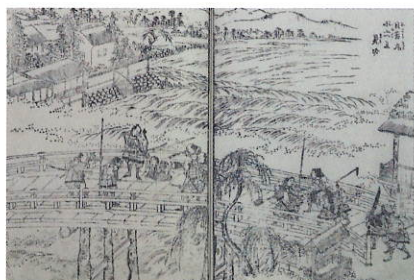
また、南朝を支えた楠木正成を描く『絵本楠公記』の刊行も、南朝の政治的立場の理解を広める役割を果たした。

『太閤記』・『絵本太閤記』  
～庶民が愛した秀吉～

各種の『太閤記』のなかで最も知られているのが小瀬甫庵（一五六四―一六四〇）によって書かれたもので、自序は寛永二（一六二五）年である。秀吉の伝記でありながら、その死や豊国神社創建については触れておらず、江戸幕府の目を意識したであろう内容となっている。

一方、秀吉の出世物語を大衆人気に高めたのが『絵本太閤記』である。寛政九（一七九七）年に初版が刊行され、庶民の評判を博したことから、享和二（一八〇二）年までの五年間に七編八十四冊が続刊された。描述された逸話は脚色も大きく、三河国岡崎の矢作川の橋で出会った蜂須賀小六正勝が野武士・盗賊

の頭領だったというのも本書から広がったイメージである。ちなみに、矢作橋が架けられたのは慶長六（一六〇一）年のことであり、この両者がであった頃は矢作川に橋はなかった。



▲秀吉と正勝の出会い（『絵本太閤記』）

『那賀郡村誌』  
～近代の地誌をつくる～

明治政府は、明治五（一八七二）年に全国地誌『皇国地誌』の編纂事業をおこした。地方では、明治八年頃に体制が整い、同十八年まで事業は継続したが未完に終わっている。

徳島県では名東・勝浦・那賀・海部・板野・阿波・三好各郡の村誌と総集編である『阿波国郡誌』の写本が残っている。『那賀郡村誌』では、疆域・地勢・地味・里程・段別・租税・戸口・山川・道路・神祠・仏刹・物産・民業などの項目が挙げられており、概ね他の郡村誌と共通しているが、こうした編集内容は国から示されていた。

この編纂事業に関わったのは、明治初期に徳島藩が古代の風土記にならって編纂をめざした『阿波国後風土記』（廃藩置県により事業中止）に関わった後藤尚豊ら郷の学者たちである。



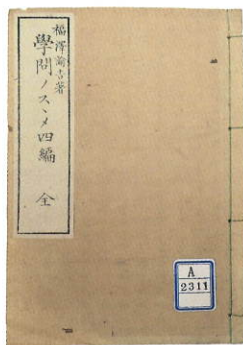


# 世界へのまなざし

十八世紀末頃からロシア船やイギリス船が日本近海に来航し、鎖国体制を打ち破ろうとするが、幕府は従来の異国船打払令に代わる新たな薪水給与令を出し、漂着した外国船には薪水食料などを与え、速やかに退去させる新たな政策へと変えていった。この状況のなか、弘化三（一八四六）年アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが浦賀に開国を求めて来航するなど、諸外国の接近は続き、人びとの目を海外へと向けていった。開国後は多くの若者が海を渡り様々な欧米の知識がもたらされた。福沢諭吉もその一人で米国、ヨーロッパを歴訪し、欧米思想を広く紹介している。西野・多田家には海外に目を開き、日本の近代化の行方を示す書物が数多く収蔵されている。そこには藍商・豪農として次世代を見据えた見識が色濃く反映しているように思える。

## 一 『学問ノスゝメ』

欧米思想に精通した福沢諭吉はその経験をもとに明治五（一八七二）年『学問ノスゝメ』を著した。冒頭の「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」という人間平等観にたち、



た『学問ノスゝメ』は歓迎され、総発行部数三百四十万の大ベストセラーになったとされる。

## 二 『異国船渡来記』

上・中・下



弘化三年五月アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルは開国を求め浦賀に来航するが、幕府はこの要求を拒絶し鎖国体制維持を図っていた。この異国船渡来記には、ビッドル艦隊の発見から交渉経

過、帰国に至るまでの一部始終が絵入りで紹介されている。この書がいつ入手されたかは不明であるが、諸外国の情報が乏しいなか、人びとに欧米諸国の動きを知らせる格好の書物であったと思われる。

## 三 『万国航海図』

この図は弘化二年にイギリスのジョン・バーディが作成したものを、沼津藩水野家に仕えた武田簡五が翻訳したものである。地図は正確で、図の中にはアメリカ大陸に到達したコロンブスの航路なども記載している。付録としてロンドンから各地への距離や「万国旗印全図」が付されている。





# 展示資料一覧

No.	表題	年代	資料番号
<b>教科書に登場する歴史的作品</b>			
1	延喜式	(近世後期)	ニシノ05368 他
2	土左日記抄 上・下	寛文元(1661)年	ニシノ03988 他
3	新刊吾妻鑑	(近世後期)	ニシノ02181
4	鴨長明方丈記	享保4(1719)年	ニシノ03948
5	里見八犬伝	天保3(1832)年	ニシノ04001
<b>様々な絵図・地図</b>			
6	築地八町堀日本橋南絵図 全	安政4(1857)年	ニシノ02451
7	芝高輪辺絵図 全	安政4(1857)年	ニシノ02461
8	目黒白金辺図 全	安政4(1857)年	ニシノ02453
9	横浜明細全図	慶応4(1868)年	ニシノ02317
10	銅刻 琉球諸島全図 全	明治6(1873)年	ニシノ02320
<b>西野家と多田家の資料</b>			
11	神仏降臨記 天	慶応4(1868)年	ニシノ07072
12	神仏降臨記 地	慶応4(1868)年	ニシノ06376
13	倭人物画譜 前編	文化5(1808)年	ニシノ08775
14	閑々題猪の図外	(近世後期)	ニシノ03726-2
<b>歴史へのまなざし・世界へのまなざし</b>			
15	絵本楠公記	(近世後期)	ニシノ01488 他
16	太平記	(近世後期)	ニシノ01362 他
17	絵本太閤記	(近世後期)	ニシノ08779 他
18	太閤記	(近世後期)	ニシノ01117 他
19	那賀郡村誌	(明治前期)	ニシノ03664
20	異国船渡来記 上・中・下	弘化3(1846)年	ニシノ02369 他
21	学問ノス、メ	明治7(1874)年	ニシノ05425 他
22	万国航海図	文久2(1862)年	ニシノ03548
<b>辞書・事典</b>			
23	倭漢三才図会	正徳3(1713)年	ニシノ02945 他
24	伊呂波節用集 全	(幕末期)	ニシノ05205
25	康熙字典	(近世)	ニシノ07821 他
<b>阿波関係</b>			
26	作良閑理	天保7(1836)年	ニシノ03518
27	欧行略記	文久2(1862)年	ニシノ03651 他
28	産論	明和2(1765)年	ニシノ03867 他
29	産論翼	安永4(1775)年	ニシノ03866 他

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

担当職員  
による

やさしい  
展示解説

日時 / 2月11日(土)・3月25日(土)  
4月14日(金)

各午後1時30分から

会場 / 文書館 2階 講座室・展示室

第65回 企画展

「近世小松島商人の蔵書Ⅱ」

〈令和5年1月31日 発行〉

編集・発行 ● 徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山

電話 088-668-3700

FAX 088-668-7199

印刷 ● (協) 徳島印刷センター

〒770-8056 徳島市問屋町165番地

電話 088-625-0135